

「祈りの残響」

—2 稿—

2025/11/18

雨森 れに

人物表

吉水 遼輔
よしみず りょうすけ
田辺 善治
たなべ よしはる

(36) 副業で猟師をしている
(79) 先輩猟師

1.

山（昼）

田舎にある小さめの山。**山桜**がちらほら咲いている。

吉水遼輔（36）が猿用の箱罠を確認する。

餌を食べた様子がない。

休憩している田辺義治（59）に向かって、

吉水 「食べてないですね」

田辺 「だろうよ。猿ってのは頭がいいからな。毎年同じ手は使えないんだわ」

吉水 「なら、どうします？ 箱の場所変えますか？」

田辺、吉水に向かって獵銃を構えるマネをする。

田辺 「バーン」

にやりと笑い、

田辺 「撃つしかねえよ。お前、もう何年だ」

吉水 「5年、ですかね」

田辺 「猿は去年からだよな。狩猟は猿撃つて一人前。わかってるんだろう？」

吉水、**手に力が入る。**

2.

公民館・外観（夕）

こぢんまりとした公民館。駐車場は満車で、自転車も複数停まっている。

3.

公民館・室内（夕）

広めの和室。住民らが集まっている。

住民1 が畳を叩く。

住民1 「獵友会は何してんだ」

住民2 「畑ばかりじゃないよ。タラの芽やふきのとうだつてやられて、商売あがつたりだよ」

住民らは吉水と田辺を睨む。

吉水、ペコペこと頭を下げつつ、

吉水 「善処してます。でも、なかなか引っかかるなくて」

住民1 「銃で殺しちまえ」

住民3 「そうだよ。ほら、私なんてこれ」

住民3が腕をあげる。

肘から手首にかけて包帯が巻かれている。

住民3 「噛みつかれてこのザマだよ！」

住民らがヒートアップしていく。

住民2 「なんで人間が我慢しなきやいけないんだか」

住民1 「毎年毎年……もう我慢できねえ。捕獲はなしだ。殺せ！」

吉水、横にいる田辺を見る。

田辺は腕を組んで考え方をしている。

吉水、頭を搔く。

吉水 「次の土日は銃で向かいますので」

住民1 「当たり前だろ！」

田辺 「銃だつてタダじやねえんだぞ」

全員の視線が田辺に集まる。

「銃のがリスクあるのによ。それを強制すんなら、もちろん報酬も弾むんだろうな」

吉水、驚いたように目を見開く。

住民らはそれぞれ目配せし合う。

田辺 「ん？ どうなんだ」

4. 吉水の車・車内（夜）

軽トラ。吉水が運転している。

「もともと銃使うつて決まつてましたよね？」

田辺 「どうせ使うならより高く、てな」

吉水、笑って、

「ちやっかりしてる」

「お前が一人前になるお祝いだつて」

吉水、田辺をちらりと見る。

「最近、何が正しいのかわからなくなります」

「やることやつてりや、大丈夫だよ」

田辺が鼻歌を歌いはじめる。

吉水の手に力が入る。

5. 山（朝）

路肩にトラックが停まっている。

吉水と田辺が降りる。

ふたりは猟銃を背負つて、山の中へ。

「先週と変わんねえなあ」

「一週間じや変わらないでしょ」

吉水、辛そうに首を揉む。

「仕事、営業だつけ」

「不動産の。今週は心がすり減りました。人のためになりたくて選んだ仕事なんですけどね」「家とか土地が？ 爭いしかねえだろ」

「なんも知らない若造が選んだもので」

吉水、足を止める。

木の皮が帯状に剥がれている。

田辺も気づき、周囲を確認する。

田辺、小声で、

「クソがあつた。まだ新しい。でも少ないな」

「群れは逃げてますね。いるのは——引きつけ役、ですか」

「かもしけん」

田辺、注意深く歩き出す。

吉水も後を追う。

かじりかけの木の実、歯形のついた草木が次々と見つかる。

田辺の歩みは速度をあげる。

吉水の呼吸が早くなる。

田辺、立ち止まる。

吉水にアイコンタクトを送る。

ふたりは猟銃を手に持つ。

木の枝がばさばさと揺れる。キーキーという猿の警戒音。

吉水、双眼鏡を覗く。

吉水は田辺に双眼鏡を渡す。

「引きつけ役にしては若いな。迷子か、追い出されたか」「だから食べ物に困つて村に？」

「そんなどこだろうな。つまり、アイツをやればいい」

田辺、吉水の背中を叩く。

吉水は猟銃を握りしめる。

田辺
吉水

田辺
吉水

田辺
吉水

田辺
吉水

田辺
吉水

田辺

「引きつけ役にしては若いな。迷子か、追い出されたか」「だから食べ物に困つて村に？」

「そんなどこだろうな。つまり、アイツをやればいい」

田辺、吉水の背中を叩く。

吉水は猟銃を握りしめる。

ゆっくりと標準を合わせる。
なかなか引き金を引けない。

木の枝が揺れる。

田辺

「おい」

吉水、発砲。

猿が草むらに落ちる。猿の動きで草が揺れる。

吉水が近づく。

獵銃を向ける。

猿は吉水に対し、拝むような仕草をする。

吉水、後退る。

田辺、吉水の背中を支える。

吉水は田辺に助けを求めるような視線を送る。

しかし、田辺は首を横に振る。

吉水、目を強く閉じる。

獵銃を構えなおし、拝む猿に向ける。

息を止め、スコープを覗く。

発砲音。

山桜の花びらが舞い落ちる。

吉水の肩から力が抜ける。

「よくやつた」

吉水、頭を抱える。

田辺
「みんな最初はそうなる。人に近いからな。でも、こいつらを殺すのが『人のためになること』なんだよ」

吉水がしゃがみこむ。

6. 公民館・駐車場（昼）

住民らが集まっている。

吉水、車の荷台から猿を下ろす。

住民から歓声が沸く。

住民1 「手間かけさせやがって！」

住民1が足で猿を小突く。

吉水、住民1を睨む。

住民1が怯む。

住民3、かがんで、

住民3 「この猿、お腹裂いてるの？」

住民2 「ホントだ」

住民らが猿をのぞき込む。

吉水が猿に自分の上着をかける。

吉水 「見世物じやないんですよ。これは確認のために見せただけですからね」

住民1 「俺らにも権利がある。どんだけ金を払つたと思つてんだ」

吉水 「悪さしてた猿は死にました。それでいいじゃないですか」

住民2 「それ飾らしてよ。じゃないとうちらの気が済まないよ」

吉水、大きく息を吸い込む。

田辺 「獵友会の決まりでね。提出するから無理なんですね」

田辺、住民1に書類を渡す。

田辺 「ここにサインね。俺らも急ぐからさ。すまないね」

住民1、不機嫌な様子でサインする。

田辺、それを受け取り、吉水に合図する。

吉水、慌てて猿を荷台に乗せる。

吉水と田辺、車に乗り公民館から去る。

7. 吉水の車・車内（昼）

吉水 「ありがとうございます」

田辺 「いいつてことよ」

吉水 「俺、やっぱり——」

吉水、バックミラーを見る。猿を包む上着が見える。

田辺 「山の神さんに供えてきたろ。あいつはまた山に生まれるよ。俺は、そう信じてる」

田辺、山を見る。

吉水、震えた声で、

吉水 「次は、村に来ないで欲しいもんですね」

8. 山（夕）

猿を撃つた場所。山桜の根元に土が盛られ、枝が刺してある。猿の墓である。

山桜がひとひら、舞い落ちる。